私、彼女の仔を産むためにモンスターとまぐわいます。

シナリオ：錫ステラ
イラスト：過ぎた卵白

少女は気づいてしまった……

愛するナナの仔を宿す方法に。

テキストあり:454枚 + 差分:248枚の合計702枚
総文字数4.5万字超えの大ボリューム!!

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

フリーデル

今作の主人公。

長く真っ直ぐな青髪が印象的な女性。
職はヒーラー。
その丁寧な物腰から、
ギルド内では「聖女」と専らの評判である。
ただし大の男嫌い。

ナナやサリィと仲がよく、よくパーティを組んでいる。
冒険者としてナナより少し先輩で、お姉さんぶった行動をとりがち。
実はナナへ友情以上の好意を抱いているが、
その思いは胸のうちに秘めている。

ナナ

前作の主人公。

質実剛健、楽天的な性格の冒険者。実力は折り紙付き。
冒険者だった両親への憧れから自然と同じ道を志し、
天性のセンスで順調に実績を重ねて今に至る。

冒険者ギルド内ではちょっとした有名人。
明るい性格でみなに慕われているが、
調子にのって失敗することもしばしば。

前作では高額報酬につられてうっかりキメラ実験の依頼を受けてしまい、
処女だったにも関わらずキメラモンスターと交配させられて妊娠、
その仔を出産する羽目になってしまった。

サリィ
実力と家柄を兼ね備えた冒険者。
実は貴族の出で、武者修行として身分を隠したまま
冒険者生活を行っている。
面倒見がよく明るい性格で、着飾ったところもないので、
ナナと同じく冒険者ギルドの人気者。
今回も友情出演。
ラムダ
王立キメラ研究所で働く主任研究員。
今回のキメラ実験を立案した張本人である。

SAMPLE

物心ついたとき私は孤児院にいた。
親も兄弟姉妹もいない、天涯孤独。
小さい頃は『本物の家族』に憧れもあったっけ。

幸い魔術の素養があったし、
勉強もキライではなかったから、
奨学金を受けて王都の魔術学院に通うことができた。

SAMPLE

卒業後は自然と冒険者になった。
根無し草な私には気ままな生活が性に合ってたから。

実力が稼ぎに直結するっていうのも、
自分の価値がはっきりして気持ちよかった。

ただ……やっぱりというかなんというか、
冒険者には粗野な連中が多かった。

SAMPLE

特に男。

初対面から馴れ馴れしかったり、
下心丸出しで近づいてきたり、
果ては力づくで襲われそうになったり。

もともと男は苦手だったけど、
冒険者を生業としているうちに私の苦手意識は決定的となった。

だけど女だけのパーティなどそうそう組めるものではない。

SAMPLE

SAMPLE

身の振り方を思い悩んでいたころ、
私はナナとサリィに出会った。

趣味も性格も違っていたけど、
なんだかヘンに噛み合って三人でつるむことが多くなった。

SAMPLE

最初はただ『親友』や『仲間』と呼べる人たちができたことを
喜んでいただけだと思う。
だけど少したってから、
私は自分の奥底に秘められた気持ちに気づいてしまった。
SAMPLE

SAMPLE

この気持ちだけは、誰にも知られてはならない。
SAMPLE

この気持ちだけは、誰にも知られてはならない。
SAMPLE

この気持ちだけは、誰にも知られてはならない。
SAMPLE

この気持ちだけは、誰にも知られてはならない。

SAMPLE

「サリィ、フリーデル、ちょっとお願いがあるんだけど……」
三人でのダンジョン攻略から戻った後の食事の席で、
出し抜けにナナがそう切り出した。
私とサリィは手を止めてナナを見遣った。
今日は一日中ナナがソワソワしていたので何かあるとは思っていた。
あまりいい予感はしない。

「ずっと欲しかったレアアイテムを街の市場で見つけたの……
けど手持ちが足りなくて……」

どうやらお金の無心のようだ。
深刻そうな顔をしていた割にはよく聞くお願いである。
ナナは貸し借りにきっちりしている質だったから、
昔はよく融通してあげていたのだが、
毎回役に立つのか立たないのか
よくわからないモノばかり買ってくるので
近頃は再考を促すことが増えていた。
私たち冒険者にとって手元のお金は重要だ。
無駄遣いは減らすに越したことはない。

「いつものナナの欲しがり癖ね。
アナタ、何でもかんでも欲しがるから
いつまでたっても金欠なのよ。
もっと節約することを覚えないと」
そうたしなめるように言うと、
ナナが目を剥いて反論してきた。

私はちょっと驚いた。
今まであまりなかった反応だ。
「違うの！今回のは本当にすっごくレアなの！
前に出回ったのは十年以上前なんだから！」

ナナの話をまとめると、
少し前に市場をフラフラしていたときに偶然
その『星々の指輪』を見つけて一目惚れしたらしい。

SAMPLE

しかしいざ買おうとしてみると、
実用性と希少価値の高さからなかなかの値がついていたそうだ。

散々金策に走ってはみたものの思うようにお金は集まらず、
人手に渡ってしまうことを危惧した結果、
私たちに相談することにしたらしい。

SAMPLE

「ん～～、そっか。わかった。
ナナがそんなに困ってるなら貸すよ。
この間まとまったお金が手に入ったからから、
今は少し余裕があるんだ」
ナナが一通り話し終わると、
それまで黙ってウンウンうなずいていたサリィがそう言った。

この子はしっかりしている方なのだが、
人が良すぎるうえにお金に無頓着なところがある。
本人は否定してるがたぶん良いところのお嬢様だと思う。
サリィのそういう性格は好きだが、今はまずい。
私はすかさず彼女が差し伸べた手を遮った。

「だめよサリィ。ナナを甘やかすとろくなことがないんだから。
だいたいいくらなのよ、そのレアアイテムとやらは。
ナナはいくら必要なの？」
パッとナナの表情が曇った。
すごくわかりやすい。
ナナのこういうところが好きだ。

「えっと……これくらい……」と言ってナナは指を三本立ててみせた。
三万や三十万のわけはない。
彼女のだいたいの稼ぎは私も知っている。
それ以上となると……。
「えへへ……あの、三百万……です」
ぎこちない笑みを浮かべながらナナはそういった。
彼女の欲しがり癖はとうとう一つの大台を超えたようだ。

SAMPLE

「んっ……くっ……あっ……」
部屋の中にくぐもった声が響く。
外には決して漏らさぬよう、
声を押し殺しながら私は自慰にふけっていた。
「ナナ……ナナ……」
囁くように、愛しい人の名を口にする。
秘部をいじる指に力がこもった。

つい先ほどのナナの姿を思い浮かべる。
私に散々な説教をされたあと、
机に突っ伏してしまったナナ。
目にはうっすらと涙がにじんでいた。
いつも元気に笑顔を浮かべているナナが見せた、
ふてくされた顔。

あまりにいじらしくて、私はちょっとだけ。
ちょっとだけ普段よりキツイ言葉で、彼女をいじめた。
ただただ、彼女のいじけた顔をもっと見たくて。
子供がするみたいにぷくーっと頬を膨らませたあの顔……
今思い返してみてもとても愛らしい。
「ナナ……ナナ……っ！強く当たってごめんなさい……
だけどアナタの泣き顔がかわいいから……
愛おしいから……私、がまんできなくてっ……！」

誰もいない部屋の中で、
空想の彼女に向かって私は熱っぽく囁いた。
素直な気持ちを言葉にするといっそう体が昂った。
本人には決して告げられない、私の秘密。
SAMPLE

さらけ出した乳首を強くつまみ上げる。
ナナに強く噛まれる情景をイメージしながら。

あんな態度をとった後だ。
きっと彼女は仕返しに私を激しく攻めてくるだろう。
ギュッギュッと乳首をつねるたび、
ゾクゾクと快感が背筋を走った。

秘部をこする指の動きが速くなる。
体の奥が熱っぽい。
もっと奥をいじりたい。
攻めてほしい。
もう下着も邪魔だ。
取っ払ってしまおう。

直接触れた秘部は想像以上に濡れそぼっていた。
遠慮なく指を奥まで突っ込み、中をかき混ぜる。
「あああっ！ナナ！ナナ！！
ダメ！それ以上はダメよ！」

空想のナナは私を激しく攻めたててきた。
私の指はその動きを完全にトレースする。
だんだん楽しくなってきたナナは私の反応を伺いながら
私の弱いところを攻め始める。
きっといたずらっぽい笑みを浮かべながら。

「んっ……はぁ……ナナ、ナナっ！」
目を閉じ、私をいじめるナナの姿を思い描く。
それに乳首と膣奥への刺激が重なる。
私はどんどん昂っていった。
膣肉が指をキュッキュッと締め上げた。
もう、来る！

「ナナ！好きっ！大好きっ！あああ～～～っ！！」
空想のナナに攻められて私は果てた。
頭の中が焼き付くような快感がスパークして、
思考が一時停止する。
すべてを忘れて己の性欲だけに身を任せる、
最高の時間だ。

けれどそのほとぼりはやがて冷め、
空想の熱は霧散してしまう。
あとに残るのはちょっとした罪悪感。
「またナナでしちゃった……」
ポツリとつぶやく。

いつの頃からか、よくナナをネタに自慰をするようになっていた。
特に今日みたいに彼女にときめいてしまった日は。
だけど私は知っている。彼女の恋愛対象に女性は含まれない。
私のこの想いは決して叶わないのだ。
SAMPLE

どこまで行っても
私達は仲のいい友人以上の関係にはなれない。
だけど。
だからこそ。
ナナのためにできることは何でもしてあげたい。
たとえそれが私の身を滅ぼすようなことになろうとも。
SAMPLE

SAMPLE

翌日、午後。
冒険者ギルドに併設されている酒場、
その奥にある依頼掲示板。

その前に私はいた。

真新しい一つの募集案内から、
私は目を離せなくなっていた。

『長期依頼。契約時に前金として報酬の半額を支払い。
報酬総額は下記の通り』
ゴクリと息を呑む。
そこには破格の金額が記されていた。

前金だけでも昨夜ナナが言っていた額をゆうに超える。

SAMPLE

脳裏には昨夜のナナの姿が浮かんでいた。
もしこの依頼を受けたなら……
ナナが欲しがっていた『星々の指輪』を彼女にプレゼントできる。
指輪が目の前に現れたとき、
彼女はどんな顔を見せてくれるだろう。
そんな想像を巡らせるだけで心が弾んだ。
SAMPLE

ワクワク、ドキドキが止まらない。
モノが指輪というのも運命を感じた。
だってまるでエンゲージリングみたいじゃない。
指輪を受け取って喜ぶナナの顔は……
是が非でも見てみたい。
SAMPLE

唯一の問題は依頼内容だ。
依頼の核心部分にもう一度目を通す。

『若くて健康、優秀な女冒険者を募集。
生殖細胞を用いたキメラモンスター作製への実験協力。
母体使用のため拘束期間は長期。それに見合った高報酬を約束……
王立キメラ研究所』

直接的な表現は避けているが、
要するにモンスターの子を孕んでくれる人間を探しているのだ。
わざわざ『母体』と書くからには出産も込みだろう。

SAMPLE

学院にいたころ、
モンスターの生殖細胞同士を融合させることで擬似的な受精卵を作り、
キメラを産み出す方法が編み出されたと聞いたことがある。
募集者はどうやらそれを人間相手でやりたいようだ。

正直にいって正気を疑う。
もっともこんな依頼、
応募者などそうそう来ないだろう。
報酬は魅力的だが、それでもやはり普通の感覚なら躊躇する。
自ら志願してモンスターと交わるなんて。

SAMPLE

けれど……。
こう考えることもできる。
女冒険者というのは常に貞操の危機と隣り合わせの仕事だ。
人間相手ならまだマシなほうで、
オークやゴブリンに襲われ犯され子を孕むなどという話は
珍しいものではない。
私だって将来いつそういう目に遭ったっておかしくはない。

SAMPLE

それに、お金に困って娼館で働く娘もけっこういる。
私もそういう手を考えなかったわけではない。
そう。だからこの依頼は『いつか来るかもしれない未来』なのだ。
それを進んで受け入れるだけで、
私は大金を得ることができる。
ナナの笑顔と天秤にかければ全く悪い話ではない。
後悔する要素はなにもないじゃないか。
私は募集案内を剥ぎ取ると、
意を決してキメラ研究所へと向かった。
SAMPLE

それに、お金に困って娼館で働く娘もけっこういる。
私もそういう手を考えなかったわけではない。

そう。だからこの依頼は『いつか来るかもしれない未来』なのだ。
それを進んで受け入れるだけで、
私は大金を得ることができる。

ナナの笑顔と天秤にかければ全く悪い話ではない。
後悔する要素はなにもないじゃないか。

私は募集案内を剥ぎ取ると、
意を決してキメラ研究所へと向かった。

SAMPLE

それに、お金に困って娼館で働く娘もけっこういる。
私もそういう手を考えなかったわけではない。

そう。だからこの依頼は『いつか来るかもしれない未来』なのだ。
それを進んで受け入れるだけで、
私は大金を得ることができる。

ナナの笑顔と天秤にかければ全く悪い話ではない。
後悔する要素はなにもないじゃないか。

私は募集案内を剥ぎ取ると、
意を決してキメラ研究所へと向かった。

SAMPLE

それに、お金に困って娼館で働く娘もけっこういる。
私もそういう手を考えなかったわけではない。

そう。だからこの依頼は『いつか来るかもしれない未来』なのだ。
それを進んで受け入れるだけで、
私は大金を得ることができる。

ナナの笑顔と天秤にかければ全く悪い話ではない。
後悔する要素はなにもないじゃないか。

私は募集案内を剥ぎ取ると、
意を決してキメラ研究所へと向かった。

SAMPLE

SAMPLE

「本日もご足労いただきどうもありがとうございます！
いよいよ実験当日ですね。体調はいかがですか？」

SAMPLE

キメラ研究所の主任研究員ラムダは、
開口一番、にこにこ笑顔でそう切り出した。
今からモンスターの仔を孕まされる人間に見せる表情ではない。
初めて会ったときも変わった人だなと思ったけど、
今日もその印象は変わらない。
今回の実験の発案者だそうだから、割と納得ではある。

「心配しなくても万全に整えてきたわ。
すべて予定通り、よ」
「では今日は排卵日ですね！」
あえて言及を避けた言葉を直球で投げ込まれる。
デリカシーもない。
「それでは……応募に来られた時にもいたしましたが、
本日の実験について改めて説明させていただきます。」

「本実験は『高い知能を持つキメラモンスター』、
具体的には『人語を解するキメラ』の作製を目的とし、
当研究所で確立した
『生殖細胞の雷系刺激融合による擬似受精卵製造法』を用いて
ヒトとモンスターのキメラの作製を試みます。」
「今回はヒト側……すなわちフリーデルさんには
卵子を提供いただきます。」

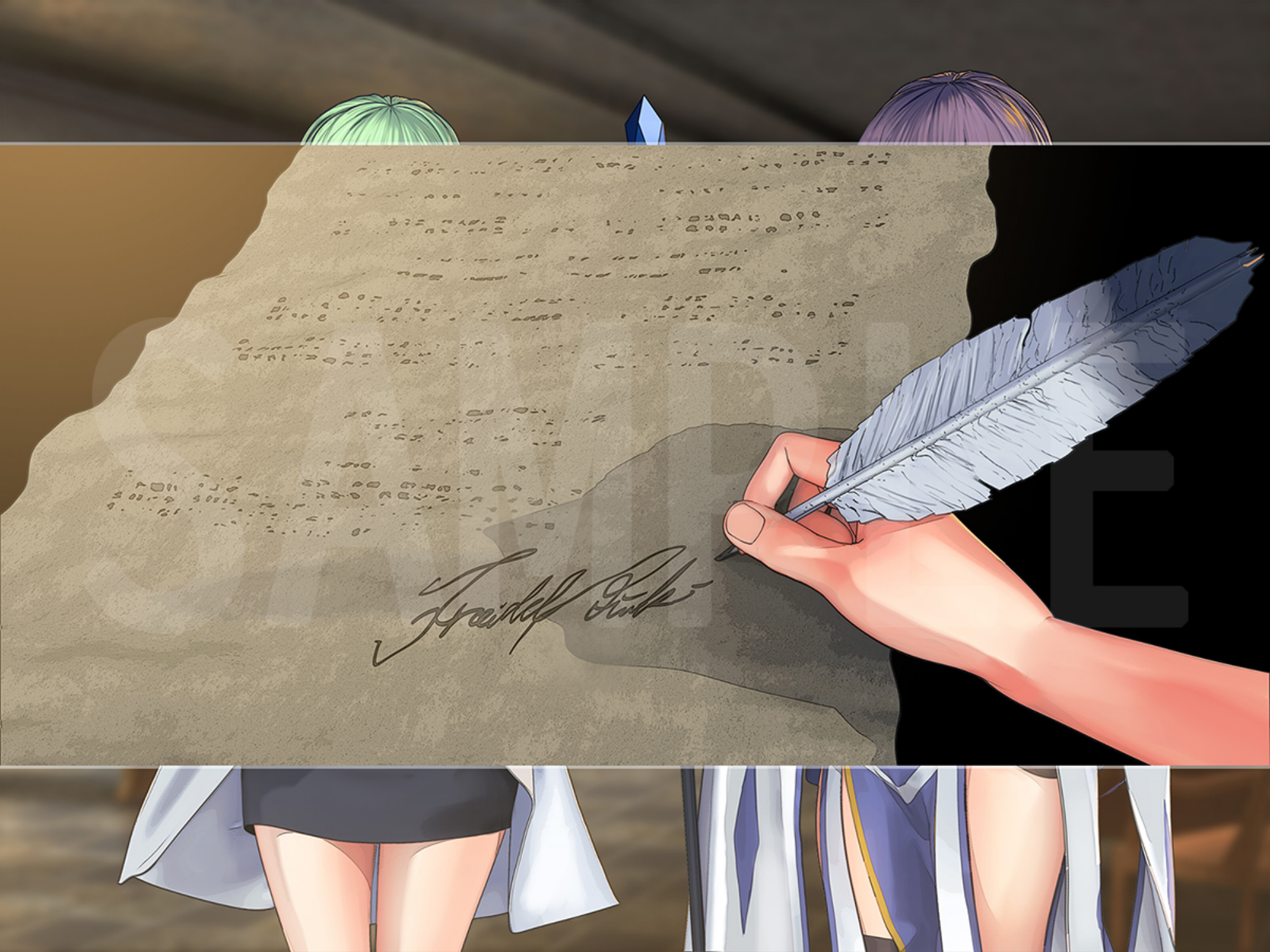
「また、ヒト側が卵子を提供する都合上、
被験者であるフリーデルさんには
母体としての役割も果たしていただきます。」
「なお、実験動物を用いた予備試験は成功裏に実施済みですが、
ヒトに適応するのは今回が初めてです。
ここまではよろしいですか？」

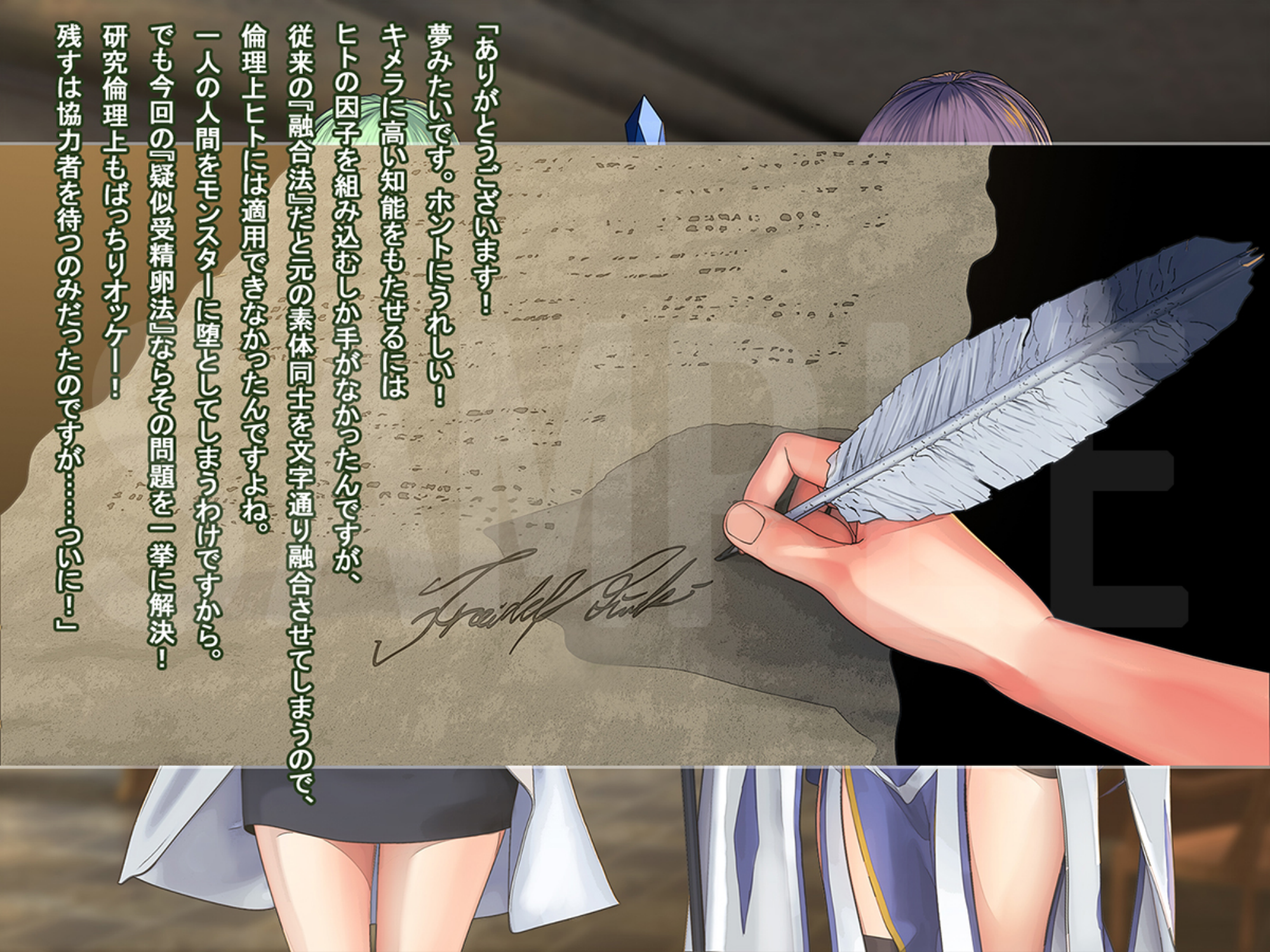
「大丈夫よ。前回も聞いたわ」
「ありがとうございます。では続けます。
経過観察等もありますから、
本来ならば出産まで所内で過ごしていただきたいところですが、
フリーデルさんたっての希望で外部での生活を認めます。
フリーデルさんのような逸材を確保するには
この程度は妥協しませんとね」
そう言ってラムダは苦笑した。

キメラモンスターの妊娠期間は不明だが、
数ヶ月も拘束されるようなことになれば
どうしたってギルドのウワサになる。
事情が事情だけに、なるべく他人に勘ぐられる事態は避けたかった。
そのような注目のされ方は私の好むところではない。
「そうしましたら、
ここまでの説明で問題がなければ
この同意書にサインをお願いします」

ラムダの差し出した冊子には表書きにデカデカと
「最終意思確認書および実験参加同意書」と記され、
中には先ほどの説明された内容が
細則とともにビッシリと書かれていた。

一通り目を通した後、サインする。
もう後戻りはできない。




「ありがとうございます！
夢みたいです。ホントにうれしい！
キメラに高い知能をもたせるには
ヒトの因子を組み込むしか手がなかったんですが、
従来の『融合法』だと元の素体同士を文字通り融合させてしまうので、
倫理上ヒトには適用できなかったんですよね。
一人の人間をモンスターに堕としてしまうわけですから。
でも今回の『疑似受精卵法』ならその問題を一挙に解決！
研究倫理上もばっちりオッケー！
残すは協力者を待つのみだったのですが……ついに！」

ラムダはサインされた書類を目を輝かせて見つめながら
一気にそこまでまくしたてると、「あ」と小さく声を上げた。
「今回は高い知能を獲得したキメラが制御不能になることを防ぐため、
相手モンスターは低級なものを用意しました。
ピグリオンです」
「ピグリオンって……
食堂のメニューで見かける、
あのピグリオン……？」
「そう。そのピグリオンです」

ピグリオンの肉といえば大衆食堂の定番食材だ。
雑食性で田畑を荒らすピグリオンは、
よく農家から討伐依頼がやってくる。
額にある石状の突起を活かした突進には
気をつけなければならないものの、
鈍重なうえに攻撃パターンが単調なピグリオンは
駆け出し冒険者御用達の……いわゆる雑魚モンスターである。
SAMPLE

一方で、なんでも食べて育ちも速いため、
食肉用の家畜として飼育されてもいる。
安価に流通しているその肉は大衆食堂に並び、
庶民のお腹を満たしているというわけだ。
私もよく食べる。
そんな食肉用雑魚モンスターが
私の交配相手ということらしい。
ピグリオンと私の遺伝子を受け継いだ仔？
そんなもの……想像もしたくない。
SAMPLE

「モンスター側が低レベルな劣等種であるほど、
キメラに現れるヒト由来の特徴が際立ちますから。」

「しかも安価に調達できて成長も速い。
我ながらよいモンスターを選んだと自負してます」

自慢気に微笑むラムダ。癪に障る顔だ。

「なるほど……私にふさわしい、立派な相手ね」

「ええ、私もそう思います」

皮肉たっぷりに放った私の言葉は、
ラムダの無垢な笑顔の前に霧散した。
この人は本気でそう考えてピグリオンを
私との交配相手に選んだのだ。
やはり彼女の人格にはなにかが欠けている。
あえて良い言い方をすれば研究に一途と言えるだろうか。
悪く言えば……人の心がない。

「それでは早速始めましょう。
準備はできています。
どうぞこちらへ」
にこやかに手を差し伸べるラムダ……
私はゴクリと息を呑んで彼女の手を取った。

SAMPLE

通された部屋には見慣れない形の台が据え付けられていた。
ラムダに言われるがまま、
私はそこにパンツを脱いで横たわった。
上半身と下半身を仕切るカーテンが引かれて視界が遮られる。
カーテンの向こう側で、
左右に設えられた小さな台に足が載せられた。

無防備に晒された秘部が外気に触れてヒヤリとした。
誰にも見せたことがない場所を、
こんな形で見せつけることになるなんて。
それにカーテンに遮られているせいで、
何が起こっているのか把握できないのがすごく怖い。

SAMPLE

「どうですか？どこか痛むところやツライところはありませんか？」
カーテン越しにラムダの声が聞こえた。
「大丈夫よ……気分は最悪だけど」
「ふふ、それを聞いて安心しました。
それでは始めますね。」

「まずは女性器の検査から。
外性器の形状は比較的きれいに保たれていますね……
色素の沈着もわずかで……。」
「内部のほうは……あら。
まだ処女膜が残っているじゃないですか。
少し裂けちゃってますけど、これはオナニーのせいかな？」

「冒険者さんなのに男性経験がないなんて珍しいですねぇ。
この実験に協力してくれるくらいですから、私はてっきり。
初めてはヒト相手でなくて大丈夫でした？」

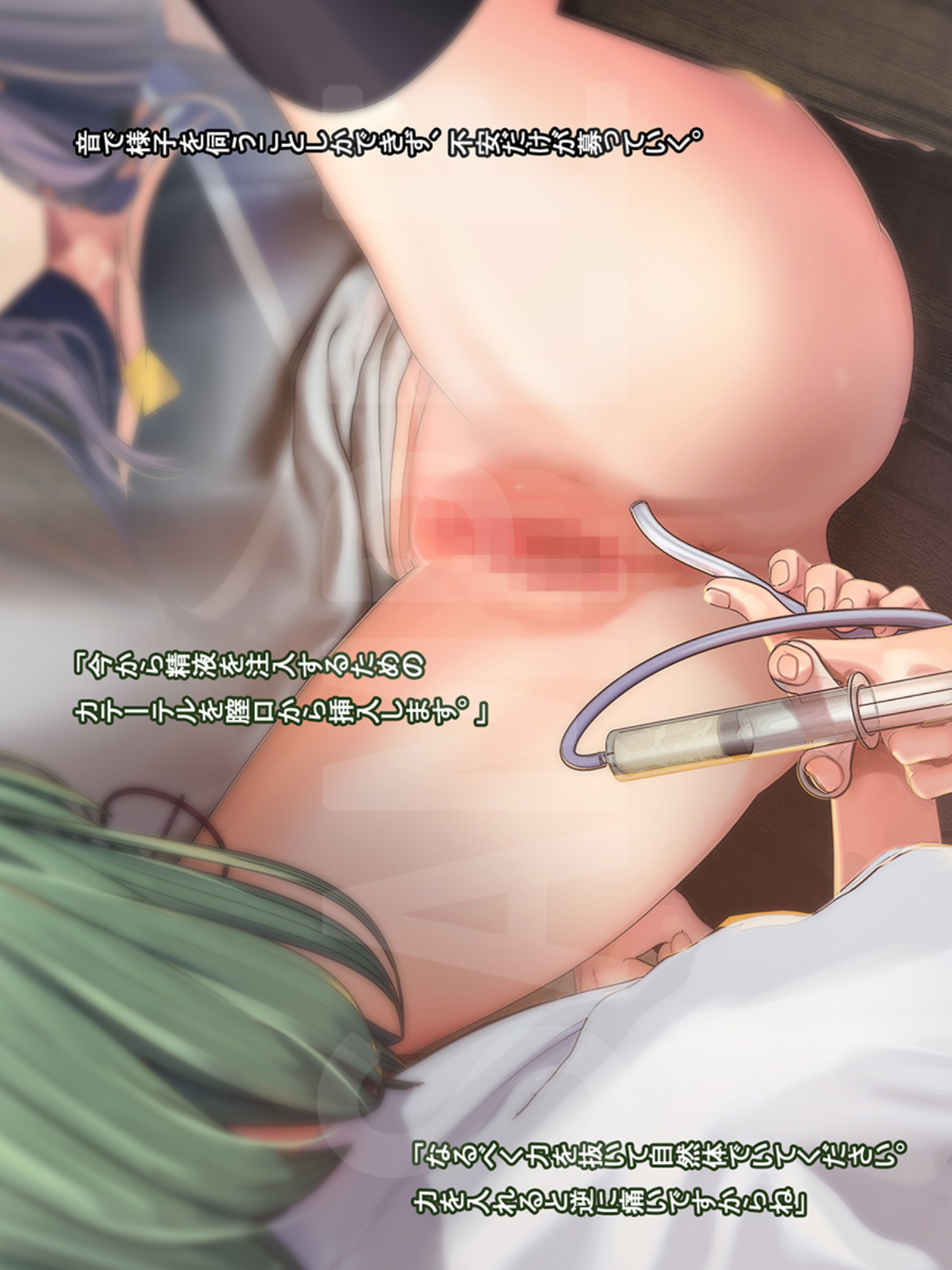
臆面もなくズカズカとプライベートな事柄を尋ねてくる
ラムダの態度にムッとして、私はぶっきらぼうに答えた。

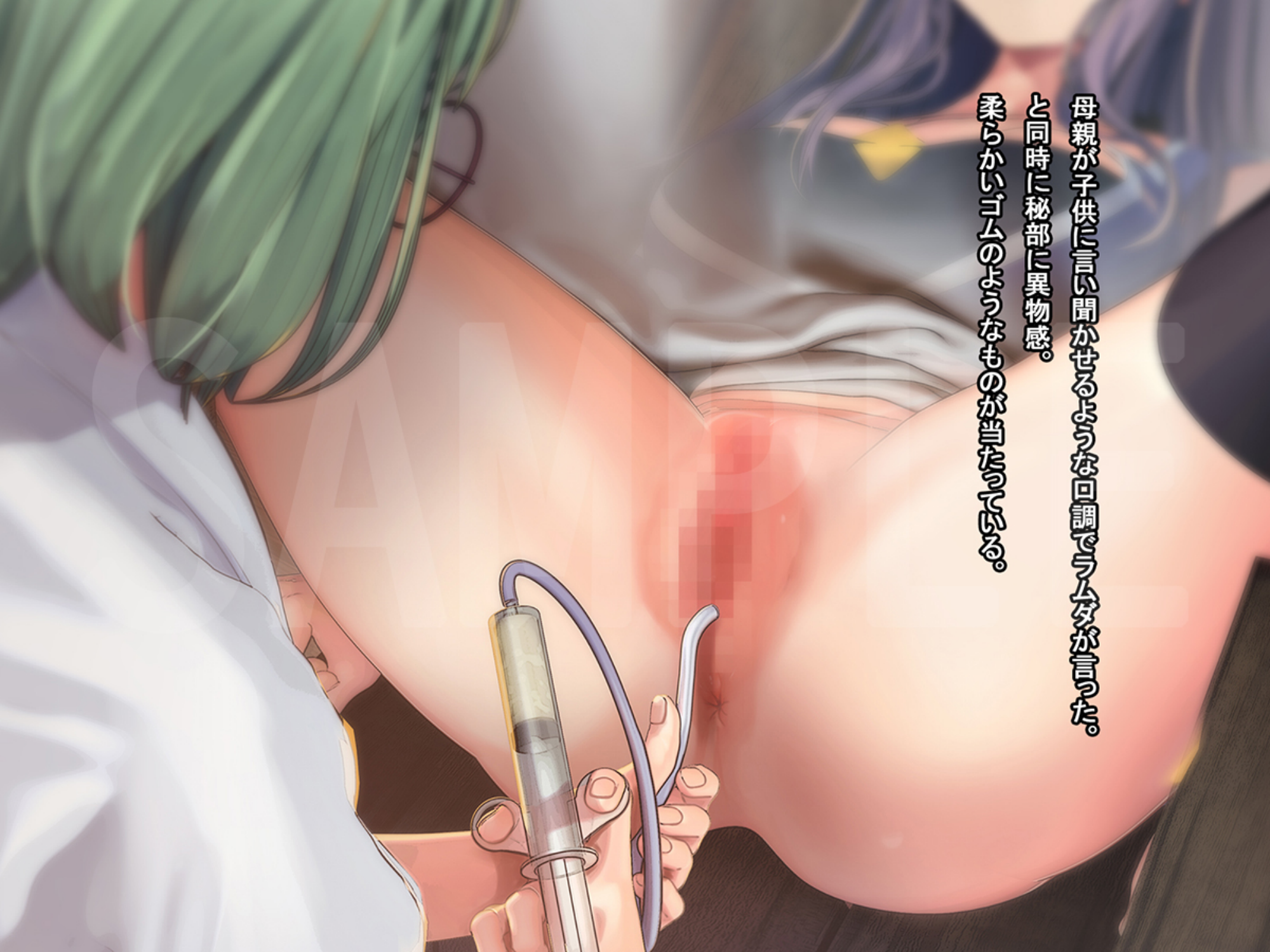
「男は嫌いよ。特に男冒険者なんて人種は。
野蛮で粗野で、一緒に行動するのだってゴメンだわ」

ふぅーん、とどこか感心したような口調でラムダが言った。
「フリーデルさんは男性嫌いでしたか。
美人で実力もあるとなれば、
男性からのアプローチは絶えないでしょうに…
もったいないですね。」
「まあ、私にとってはそんな優良遺伝子を持った方が
無傷のままキメラ実験に参加してくださったわけですから
万々歳ですけど♪」

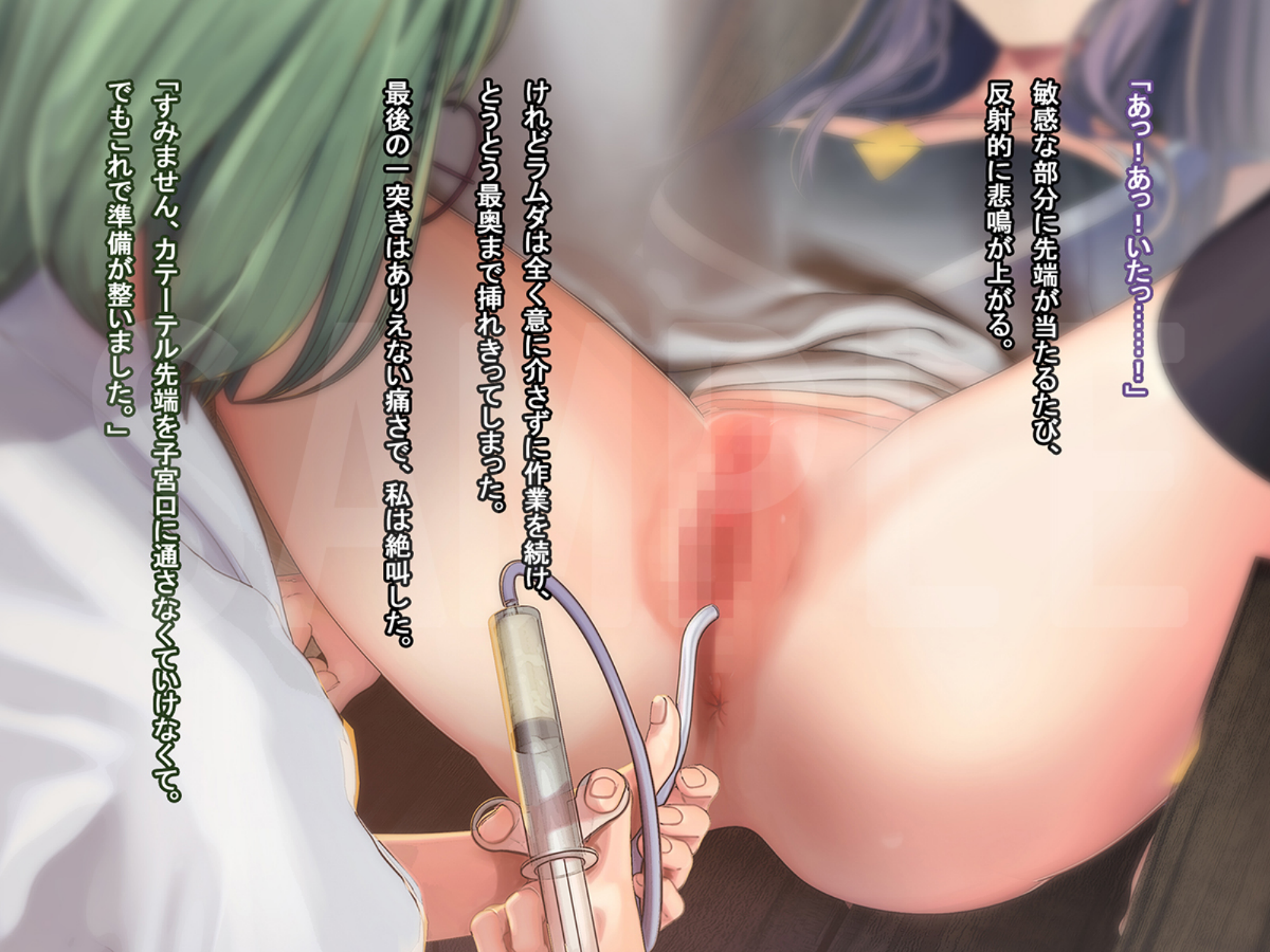
「このお尻も大きくて、
元気な赤ちゃんを産めそうで何よりですよ？」
「ひゃっ！」
冷たい手で唐突にお尻を撫で回され、
口から小さな悲鳴を上げてしまった。
コイツ、人が大人しくしていれば……っ！！
本人には煽っているつもりがないところも質が悪い。

「さてさて。検査結果は上々。
男性経験なし、未使用の生殖器ということで
非常に素晴らしいですね。」
「もちろん直近に性交もなくて、
精子のコンタミの恐れなし。
予定通り実験を実施しましょう」
カーテンの向こうからラムダの嬉しそうな声が響く。
同時にカチャカチャと金属の触れ合う音が聞こえた。
なにか道具を準備しているようだ。


音で様子を伺いつつです。不安なお顔ですね。
「今から精液を注入するための
カテーテルを膣口から挿入します。」
「なるべく力を抜いて自然体でいてください。
力を入れると痛いですからね」


母親が子供に言い聞かせるような口調でラムダが言った。
と同時に秘部に異物感。
柔らかいゴムのようなものが当たっている。

「はーい、それでは入りま～す。
痛かったら言ってくださいね」
若干間延びしたラムダの声とともに、
その異物は私の中に入ってきた。
細くて柔らかいそれは
ズブズブと私の奥へ奥へと進んでいく。
そしてあっさりと私の指が届く範囲を越えると、
未知の領域へと踏み込んでいった。
まだ誰にも触れられたことのない、私の大切な場所。


「あっ！あっ！いたっ……！」
敏感な部分に先端が当たるたび、
反射的に悲鳴が上がる。
けれどラムダは全く意に介さずに作業を続け、
とうとう最奥まで挿れきってしまった。
最後の一突きはありえない痛さで、私は絶叫した。
「すみません、カテーテル先端を子宮口に通さなくていけなくて。
でもこれで準備が整いました。」

「カテーテルの反対側はこのとおり、
ピグリオンの精液を充填したシリンジにつながっています……
ってそちらからは見えませんでしたね。
精液、見てみます？」
「結構よ！」
悪趣味なこと、この上ない。
いや、本人に悪気はないのだろう。
今もカーテンの向こうでキョトンとしている顔が目に浮かぶ。

「つい先ほど採取したばかりなんです。
健康な若いオスのものですから、
中は活きの良い精子でいっぱいですよ。」
「今日はきっと上手くいきます！
では注入していきますね」
ぐっと体が強ばるのがわかった。

他人の指先一つに自分の運命を握られている状況。
私の純潔がピグリオンごときに汚されるか否かは
もはやラムダの手の中だ。
彼女が指に力を込めるだけで……。
恐怖と、緊張感。

不意に下腹部に熱を感じた。
生暖かなドロリとした液体が体の奥へ染み込んでくる感覚。
一瞬の思考停止のあと、
ピグリオンの精液が胎内に注がれたのだとわかった。
……この身に受け入れてしまった。
ピグリオンの、モンスターの精液を。

『……っ！』
何か言いたかったが、緊張のあまり声にならない。
ただ虚空に息が吐き出されるばかり。
その間にも容赦なく精液は注がれ続け、
どんどんお腹が張る感覚が強くなっていった。
これってつまり、
私の子宮内がピグリオンの精液でパンパンに満たされてるってことだ。
ラムダは一体どれだけの量の精液を用意してきたんだろう。
絶対に孕ませるという強い意志を感じる。

「注入終わり。カテーテル除去しますね」
ふたたびズキンとした痛みがした後、
カテーテルはあっけなく抜けていった。
お腹が張りすぎていて精液が
逆流するのではないかと思ったが、
それほど漏れた感覚はない
ピグリオンの精液は不気味な熱を帯びたまま、
まるで塊のようになって留まっていた。
私の子宮内に。

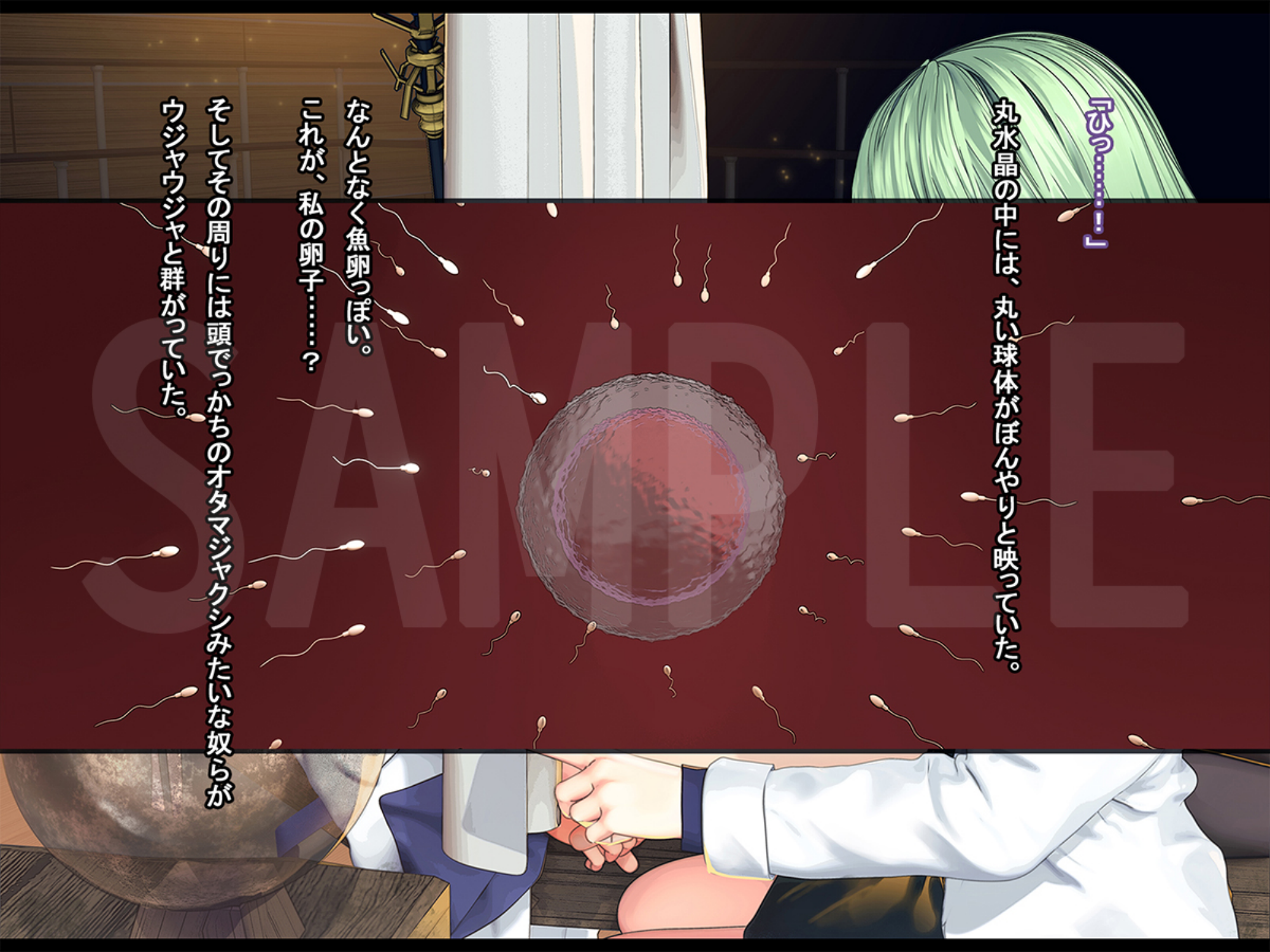
その不快な熱が、
あんな下等で愚昧なモンスターの精液を
お腹に抱えているという事実を強く意識させる。
実際に性交させられたわけでもないのに、
激しい嫌悪感が湧き上がってくるのを止めることができなかった。

「子宮内に充填したので
すぐに精子が卵子まで到達すると思います。
さっそく見ていきましょう」
そういうとラムダは小さな角水晶を取り出し、
私のお腹に当てた。

学院での学生実験のときに見たことがある。
たしかこれを当てたものの内側の様子を、
ペアリングされた丸水晶に投影する道具だったはず。
ということは……。
私の脇に置かれた丸水晶へ視線を移す。

「フリーデルさんの卵子はどこだ……っと……。
あ。ありました、ありました。見てください。ほら」
ラムダに促されるまま、
彼女が指差した丸水晶内の映像を見た。
正直言って恐怖心しかないが、
何もわからないのはもっと怖い。
心を落ち着けるためにも何かしらの情報がほしかった。

SAMPLE


『ひっ……！』
丸氷晶の中には、丸い球体がぼんやりと映っていた。
なんとなく魚卵っぽい。
これが、私の卵子……？
そしてその周りには頭でっかちのオタマジャクシみたいな奴らが
ウジャウジャと群がっていた。
SAMPLE

まるで何かに引き寄せられるように、
その大きな頭部の先端を必死に卵子へ押し付けている。
何匹ものオタマジャクシが卵子の周囲で蠢く様は、
ただただ不気味な光景だった。
SAMPLE

「中央のこれがフリーデルさんの卵子、
周りのこれがピグリオンの精子です。
やっぱり鮮度が違いますね。全力で泳いでますよ。
ただ彼らはこのままでは受精できません。
なぜだかわかりますか？」

先生が生徒にきくような口調でラムダが尋ねた。
雰囲気に気圧されて、私はおずおずと答えた。

「人間とピグリオンでは種族が違うから……」

SAMPLE

「そうですね。
もう少し詳しく述べると、
ピグリオンの精子はヒトの卵子を覆う膜を突破できないんです。
膜を溶かす薬剤が必要で、
それはヒトや一部の亜人種の精子しか持っていません。
これが鍵と鍵穴のような関係になって、
異種族間での受精を阻んでいるというわけです。
まさに生命の神秘、ですね。
もちろんピグリオンに孕まされたヒトは歴史上一人も存在しません」
そこでラムダは一呼吸おいた。

「ではどうするか。
我々の新技術『細胞の雷系刺激融合』の登場です。
実は雷系魔法をですね、
短い間隔でこうパッパッパッとかけ続けてやると、
ある瞬間に接触している細胞同士の境界が
崩れて融合してしまうんです。」
「そしてそのまま核が混じり合い、
一つの細胞として機能し始める。
つまり生殖細胞でやると擬似的に受精を再現できるんですね。
では始めますよ。ちょっと痺れますけど我慢してください」
そう言うとラムダは小声で詠唱を始めた。
SAMPLE

SAMPLE

すぐに下腹部に針で刺されたような痛みが走った。
チクチクチクチクと何度も繰り返される。
痛みが走るたびに丸水晶が明るく光り、
何度も明滅を繰り返した。

魔法をかけ続けながら真剣な表情で
じっと丸水晶を覗き込んでいたラムダだったが、
突然その顔がぱぁっと明るくなった。

SAMPLE

「あっ！いきましたっ！
融合成功ですよ。
ほら、ここのところです」
SAMPLE

SAMPLE

ラムダの指差したところでは卵子がいびつに盛り上がり、
側にオタマジャクシの尾っぽと思しきモノが漂っていた。

「これ。ここが精子の頭部、
遺伝情報の詰まった部分が融合したところです。
核ももう混ざり合っているはずですよ。
上手く行ってればすぐに細胞分裂が始まるはずです。
見ててください……！」

SAMPLE

ラムダは丸水晶内の映像から目を離さずにそう教えてくれた。
その表情からは緊張感が伝わってくる。
彼女に倣って私も見つめた。
口の中がカラカラに乾き、胸のドキドキが収まらない。
今まさに私の胎内でキメラが誕生しようとしているのだ。
けれどいつまで経っても変化は起こらなかった。
訳が分からずもう一度ラムダの顔を見やると、
そこには明らかに焦りの表情が見て取れた。

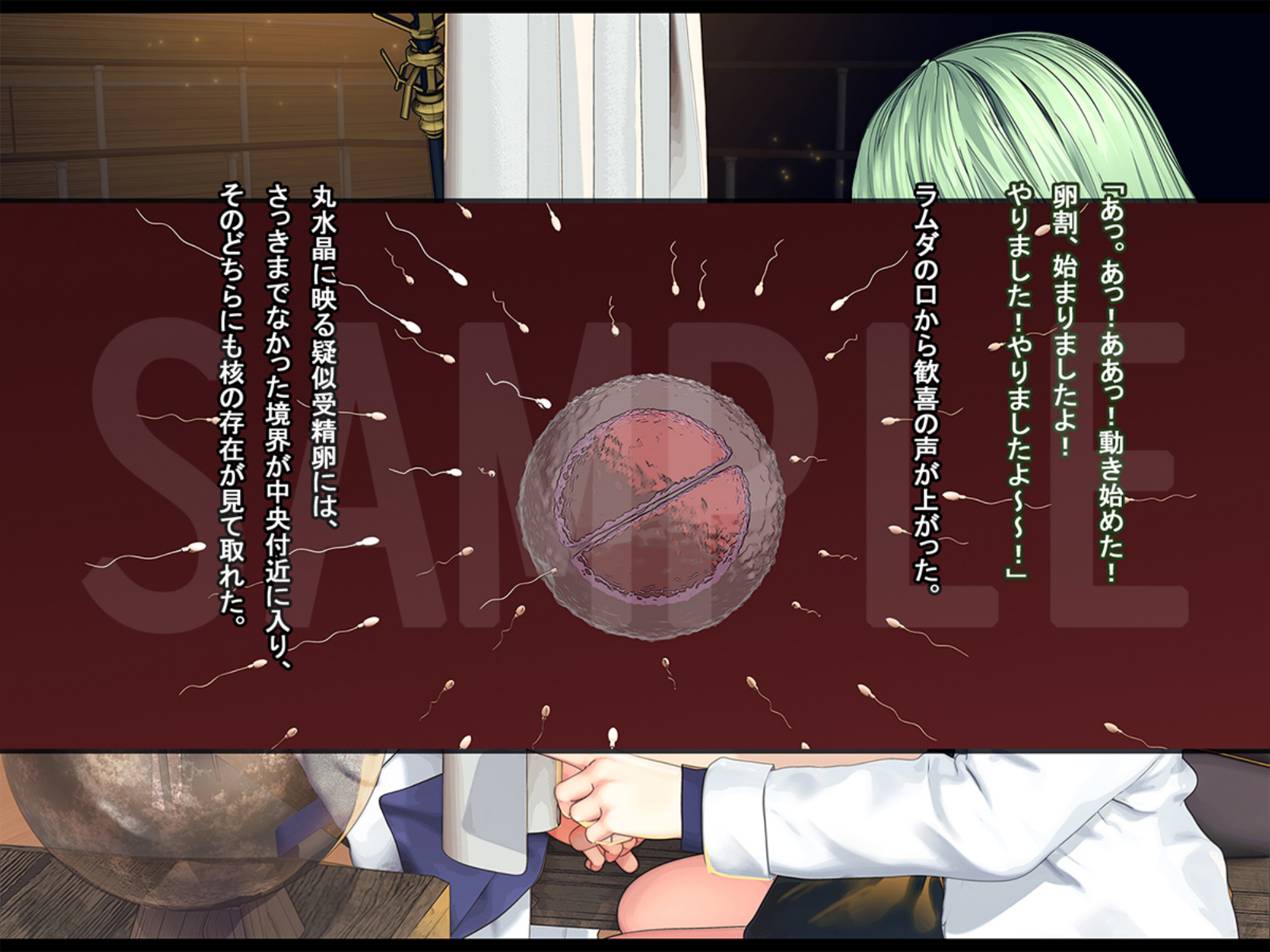
SAMPLE

どうやら彼女にとって想定外のことらしい。
そういえば人間相手にやるのは
今回が初めてと言っていたっけ。

失敗したのかもしれない。
いや、失敗であってほしい。
それなら私はモンスターの母にならずに済むのだから。
けれど運命の女神はラムダに味方したみたいだった。

SAMPLE

SAMPLE


『あっ。あっ！ああっ！動き始めた！
卵割、始まりましたよ！
やりました！やりましたよ～～！』
ラムダの口から歓喜の声が上がった。
丸水晶に映る疑似受精卵には、
さっきまでなかった境界が中央付近に入り、
そのどちらにも核の存在が見て取れた。
SAMPLE

分裂している。生きている。
不意に『魔力感知』に感があった。
普段はダンジョン内で
物陰に隠れたモンスターを察知するために使うスキルだ。

弱々しいそのシグナルは……私のお腹の中から発せられていた。
私の胎内で分裂を始めた疑似受精卵は、
モンスターとして認知されたのだ。

SAMPLE

私の仔……
私の遺伝情報を受け継いだモンスターが……ここにいる。
私は自身の血肉を分けてこれを育て、
産まなければならない。

グラリと目眩がして視界が歪んだ。
でもこれもナナの喜ぶ顔を見るためなんだ。
後悔はない。後悔は、ない……。

SAMPLE

私の仔……
私の遺伝情報を受け継いだモンスターが……ここにいる。
私は自身の血肉を分けてこれを育て、
産まなければならない。

グラリと目眩がして視界が歪んだ。
でもこれもナナの喜ぶ顔を見るためなんだ。
後悔はない。後悔は、ない……。

SAMPLE

私の仔……
私の遺伝情報を受け継いだモンスターが……ここにいる。
私は自身の血肉を分けてこれを育て、
産まなければならない。

グラリと目眩がして視界が歪んだ。
でもこれもナナの喜ぶ顔を見るためなんだ。
後悔はない。後悔は、ない……。

SAMPLE

私の仔……
私の遺伝情報を受け継いだモンスターが……ここにいる。
私は自身の血肉を分けてこれを育て、
産まなければならない。

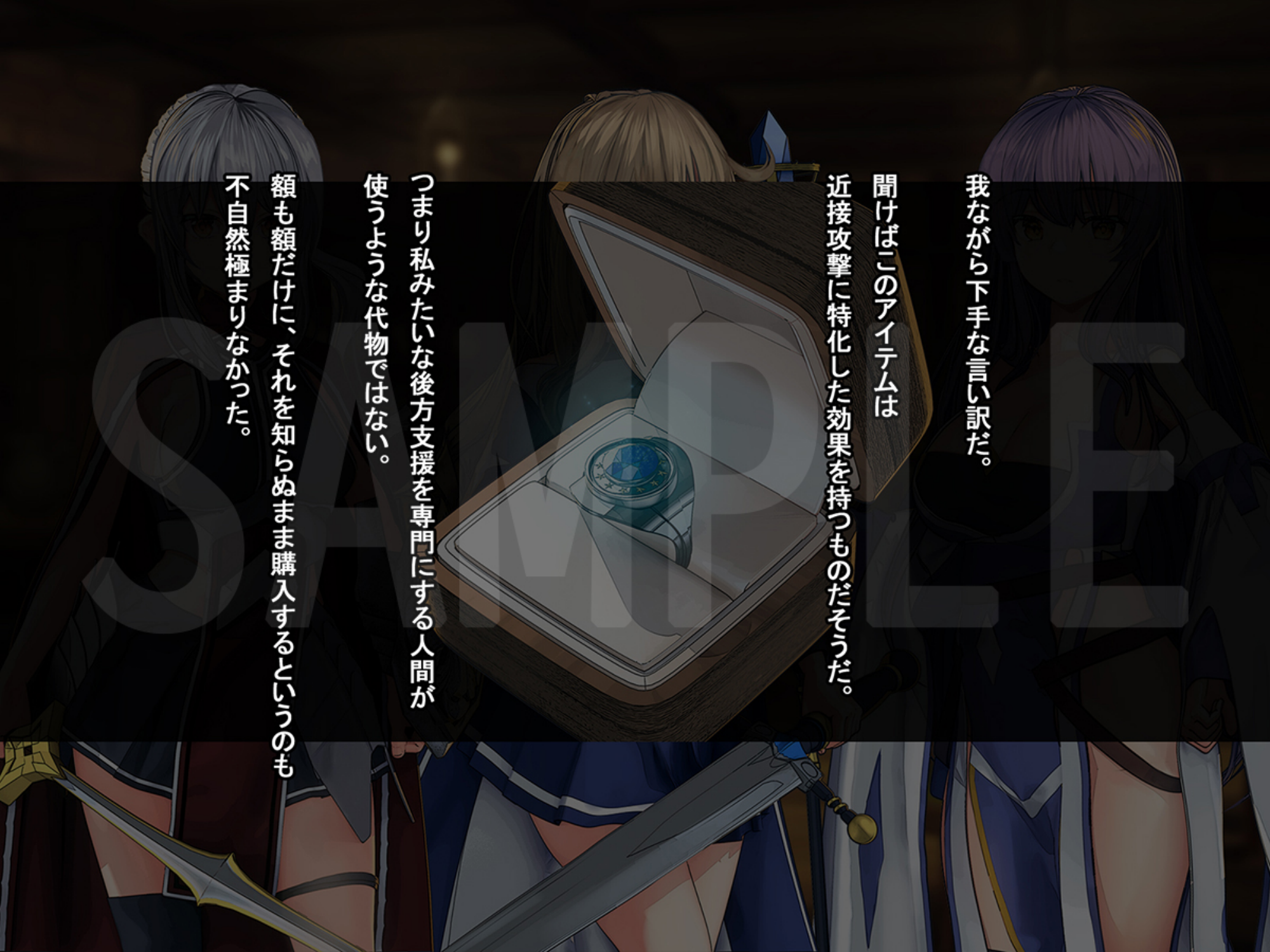
グラリと目眩がして視界が歪んだ。
でもこれもナナの喜ぶ顔を見るためなんだ。
後悔はない。後悔は、ない……。

SAMPLE

「ナナ。はい、これ」
「ん～？なぁに、フリーデル？」
私が机に置いた小箱に視線を向けた瞬間、
ナナの動きが止まった。

ナナとサリィと三人でダンジョンへ出かけた帰りの食事の席。
タイミングを見計らい、
意を決して私は小箱を差し出した。
中にはナナが欲しがっていた『星々の指輪』が輝いている。
こうやってみると、
まるで婚約指輪を差し出してプロポーズしている気分だ。
ナナは目を見開き、たっぷりと指輪を見つめた後、
私の方を振り向いて目をパチパチさせた。

「なんで……？」
ポツリとナナがつぶやく。
純粋な瞳にまっすぐ見つめられると急に恥ずかしくなって、
私はナナから目線をそらして答えた。
「ちょ、ちょっと臨時の収入があったのよ。
それで、ナナがあそこまで欲しがるのって
どんなものか興味があったから買ってみたの。
私にはあんまり役に立たなかったけど……」


我ながら下手な言い訳だ。
聞けばこのアイテムは
近接攻撃に特化した効果を持つものだそうだ。
つまり私みたいな後方支援を専門にする人間が
使うような代物ではない。
額も額だけに、それを知らぬまま購入するというのも
不自然極まりなかった。
SAMPLE

とはいえ、初めからプレゼントするつもりで
買ったとは言いづらい。

そんなことを言って理由を詮索されたら目も当てられないし、
最悪受け取りを拒否されるかもしれない。

だから私は
『あくまで自分用に買った』という建前を保ちたかった。

SAMPLE

「それで、私はもう満足したから……
アナタが使いたいなら貸してあげるわ」
「えええ？！」
ナナが素っ頓狂な声を上げる。

まずい。
やっぱり不自然すぎたかもしれない。
けどここで変に気を遣われたりしたら全ての苦労が水の泡だ。
「い、嫌ならいいのよ。売っちゃうから」
心にもないことを告げる。
押してだめなら引いてみろ。
お願い、食いついて！

「それはダメ！お願い！お願いします！
フリーデル様〜〜貸してくださいっ！」
慌てたナナが必死の形相で止めに入った。
思わず笑みがこぼれそうになる。
ダメよ……まだダメ。
ここは堪えて。
ナナが欲しがって
いるから仕方なく貸してあげるって風を装わなければ。

「しょ、しょうがないわね……
好きに使ったらいいわ。
返すのは、アナタが満足したらでいいから」
そう言って私は指輪の入った小箱をナナの目の前に置いた。
ナナの目はすでに指輪に釘付けだ。
こころなしか、いつもより瞳がキラキラ輝いてみえる。

ナナはおそるおそる指輪に手を伸ばすと、
震える手で取り出し、そっと指にはめた。
近くの照明にかざして、その輝くさまをうっとりと眺めている。
その姿が何よりも尊い気がして、
私は胸がキュンキュン締め付けられた。
ナナが、私のプレゼントした指輪をはめて、
恍惚の表情を浮かべている。
こんなの、プロポーズに成功したようなものでしょう？！

クスクスと小さな笑い声がした。
ハッとして声のほうを見ると、
サリィが私に向かってニコニコと微笑んでいた。
「フリーデルってば、私にはあんな風に言っておいて……
自分のほうがよっぽどナナに甘いじゃない。
今だって幸せそうにナナのことを見つめちゃって」
「そんなこと！」

サリィに自分の気持ちを見透かされてしまったような気がして
反射的に否定の声を上げてしまった。
けれど、ここは強く否定すればするほど
ドツボにはまってしまいそうだ。
続く言葉が見つからず、逡巡している私をナナが呼んだ。

「フリーデル、ありがとう！
これ、大事にするからね！」
真っ直ぐに私を見つめてお礼の言葉を述べるナナ。
そうだ。何を自分の体面なんか気にしてたんだろう。

ナナが喜んでくれている。
それで私は十分なんだ。
このキラキラした笑顔を私に向けてもらえている。
それで私は幸せなんだ。
そう思ったら急に肩が軽くなった。
ふぅと一息ついて、私も笑顔でナナに応えた。
「そうしてもらえると私も嬉しいわ」

喜ぶナナを見ていると幸せな気持ちになる。
私の心は今とても温かい。
本当に、指輪をプレゼントできてよかった。
指輪を受け取ってはしゃぐナナを見れてよかった。

ズキン、と下腹部が痛んだ。少しだけ張ったお腹。
『魔力感知』のシグナルは強くなっている。
後悔はない。決して後悔はしていない。
SAMPLE

SAMPLE

キメラをお腹に宿している間、
普段と違うことをして変に勘ぐられるのはなるべく避けたい。
だから私は努めていつもと同じように振る舞った。

定期的にやっていたナナとサリィとの
三人パーティでのダンジョン攻略もその一つだ。

けれどこの日はそれが裏目に出た。

SAMPLE

「はぁあ……今日のところはやけにホコリっぽかったね。
汗もかいたし、全身ベトベトだよ～。
ねえねえ、このまま共同浴場に寄ってかない？
一風呂あびて、さっぱりしてから帰ろうよ」
「それいいね！そうしようそうしよう！
フリーデルも行くでしょ？」
唐突なナナの提案に背筋が凍った。
さらに悪いことにサリィまでもが乗り気だ。

SAMPLE

この街には半野外の広々とした共同浴場があり、
冒険者ギルドに所属していれば
いつでも無料で利用することができる。

男女別にはなっているものの、
『共同浴場』の名の通り、
大きな湯船にみんな一緒に浸かることになる。

つまり……互いに裸を晒さなければならない。

SAMPLE

そっとお腹をさする。

服の上からならそこまで目立ちはしないが、
すでにだいぶ大きくなってしまっている。

一緒にお風呂に入ろうものなら
私が妊娠していることは絶対にバレてしまうだろう。

誤魔化しようがない。

SAMPLE

けれどここで断るのもまた不自然だった。
なぜって、普段であれば私のほうからお風呂に誘っていたから。
断ったりしたら絶対に怪しまれる。

ここは……一緒に行きつつ、
なんとかお腹だけは隠し切るしかない。

「……いい案ね。私もちょうど行きたいと思っていたの」

話を合わせてニコリと微笑む。
ぎこちない笑顔になっていないかが気がかりだった。

そうして私は三人で共同浴場へ向かうことになってしまった。

SAMPLE

「フリーデル、なんでタオルを巻いたまま身体を洗ってるの？
それじゃあよく洗えないでしょ」
「い、いいのよ。こういう洗い方もあるの！」
浴場に入ってすぐ、
私たちは流し場で並んで身体を洗っていた。

本当は別行動をとろうと思っていた。
しかし、浴場に入るなりナナが
そのまま湯船に飛び込む素振りを見せたので
つい呼び止めてしまったのだ。
ホコリまみれで湯船に浸かるわけにはいかないから……
って、今はそれよりお腹がばれないことが優先だったのに。
SAMPLE

仕方なく、素知らぬ顔でタオルを巻いたまま
身体を洗っていたのだが……
ナナに目ざとく見つけられてしまった。
気づいてほしいことには鈍感なくせに、
なんでこういうことには目ざといのか……。
SAMPLE

ナナはじっと私を見つめている。
これ以上余計なことを言ってボロを出すのも怖くて、
私はナナを無視して身体を洗い続けた。
相手をすればするほど墓穴をほってしまいそうだ。
さっさとこの場を離れて、ぱっと湯船に浸かって、
早々に上がってしまおう。

……と、思っていたのだが。

「タオルつけたままはマナー違反だよ！
隠さずぜんぶ見せなさ～～い！」

SAMPLE

ナナのいたずらっぽいセリフとともに、
身体を包んでいたタオルが剥ぎ取られた。
突然の出来事に頭が真っ白になる。
一瞬の思考停止の後、私は血の気が引くのを感じた。
まずい！お腹を見られる！！

「あはは！フリーデル、どうしたのそのお腹！」
ナナの明るい笑い声が響いた。
予想と異なる反応に私は若干戸惑った。
妊娠した姿を見て笑う？なんで？？

「あらら～～生活習慣にも口うるさいフリーデルが
こんなだらしないお腹をしてるなんて、らしくないなあ。」
『身体のたるみは心のゆるみよ』とかよく言ってるのに～。
あ、お昼ごはんが控えめだったのも、
もしかしてダイエットだったのかな～？」

からかうような口調でナナが続けた。
そこでようやく私も得心が行った。
ナナは、私がただ太っただけだと思っているのだ。

考えてみれば無理もない。
つい最近まで私の身体は妊娠なんてしていなかったし、
そもそも恋人もいない。
亜人種のモンスターに犯されたなら
浄化もせずにのんびりしているわけもない。
つまり、妊娠しているなんて発想は最初から頭にないのだ。
SAMPLE

ほっとすると同時に、こんな無様な姿を
ナナにまじまじと見られていることが恥ずかしくなってきた。
しかも太ったと思われている。
ナナには、大好きな人にはキレイでかっこいい自分を見せたいのに。
SAMPLE

「違うから！
これは、このお腹はそういうのじゃないから！
私は別に不摂生で太ったわけじゃ……」
顔を真っ赤に火照らせながらそこまで言ったあと、
私はハッとして口を噤んだ。

かっこ悪いところを見せたくないばかりに
自分から妊娠の事実をばらしてしまうところだった。
ちょっとパニックになっている。
どうかしている、今日の私。

「まあ太っちゃったのはしょうがないからさ。
これからの対策を考えようよ。
やっぱダイエットには運動が一番だし、
一緒にダンジョン通いする？」
「ちょうど私、しばらく金策したいと思ってたんだよね。
フリーデルがサポートしてくれると助かるし、
一緒にどう？サリィと三人で」

さすがにからかい過ぎたと思ったのか、
ナナがちょっとしおらしくしながらダンジョン通いに誘ってくれた。
固定パーティを組んで毎日潜ろう、ということのようだ。

ナナと一緒にいる時間が増えるのは嬉しいし、
妊娠のこともバレてはいないみたいだから、
個人的には嬉しい提案ではある。
無下にする理由はなかった。
「私は構わないけど……サリィはどうする？」

「ごめーん！
実は明日から長期の傭兵のお仕事を受けちゃってて……
しばらくパーティ組めないの。ホントごめんね！」
「ありゃ、そうなの？」
ナナが拍子抜けした声を上げた。
「うん。ほら、こないだ酒場で話しかけてきた男性パーティの……」

「ああ、あのパッとしない男冒険者の二人組かぁ。
ん～～～、それなら二人でダンジョン通いだね」
ニコリとナナがこちらに微笑んだ。
ドクンと心臓が大きく鳴った。
ナナに聞こえなかったか心配になるくらい。

ナナと組むときはだいたいサリィも一緒だったから、
二人っきりで、しかも毎日というのは初めての経験だ。
飛び上がるほど嬉しかった。
もちろん身重の身体なのは不安だけど、
それでもこのチャンスを逃したくはない。
SAMPLE

喜んでいるのが気取られぬように、
私はあくまで落ち着き払って返事をした。
「ナナとしばらく二人っきり？
そう……そういうのもたまにはいいわね……」

「じゃあ決まり！
元の体型を目指してハードめに行くから覚悟しててよね！」
「アナタこそ、私の足を引っ張らないように努力なさい」
しっかりとクールに決めたつもりだったのに、
ナナとサリィは互いに目を合わせてクスクス笑った。

それからしばらくの間はすごくすごく楽しい時間だった。

朝から晩までダンジョンに潜って、
力を合わせてモンスターを蹴散らして、
レアアイテムを探して、街に戻る。

いつもの探索ルーティンだっていうのに、
毎日ナナと一緒に過ごせるってだけで全てがバラ色に見えた。

SAMPLE

二人きりだし、もちろん衝突したり
ケンカになったりすることはあったが、
それも必要な一時だったと思う。

いつも最後はキレイに収まるのだから。
ケンカするほど仲がいいのだ。

だけどそんな私の気持ちをよそに、
お腹は日増しに大きくなり続けた。

SAMPLE

一週間で一回り大きくなる。

ピグリオンの胎児は成長が速いときいていたが、
私の胎内のキメラもその形質を遺憾なく発揮しているらしい。

胎児が速く育つということは母体にかかる負担も大きい。
連日のダンジョン探索と相まって、
私の身体には相当疲れが溜まっていた。

SAMPLE

ある日、私はダンジョン内で嘔吐した。

ナナの目の前で為すすべもなく膝を付き、
みっともなく嘔吐した。
体力が限界だったのかもしれないし、
つわりだったのかもしれない。

SAMPLE

いずれにせよ私はこれ以上、
ナナとダンジョン通いを続けることは
できなくなってしまった。

ナナに無用の心配はかけたくなかったし、
かっこ悪いところを見せるのも嫌だったから。

結局私は、臨月までの残りの期間を
キメラ研究所で過ごすことに決めた。

SAMPLE

予想通り『その日』はすぐにやってきた。

SAMPLE

あれよあれよという間にお腹は大きく膨らんで、
母乳まで出るようになって、
私の身体は紛れもなく妊婦になった。

ピグリオンの妊娠期間はおおよそ1ヶ月程度だというから、
私のお腹のキメラモンスターは
ピグリオン並のスピードで育つことになる。

この仔の半分は私で、育んだ母体もまた私なのに。

SAMPLE

私の持つ『人間』としての属性を
モンスターのそれに塗りつぶされているみたいで、
ただひたすらに不快だった。

モンスターによって作り変えられた私の身体。

そして……
とうとう私はモンスターの母になるのだ。

SAMPLE

「うううう……うううん……」
枕に顔をうずめたまま私はうめいていた。
こうしていると声とともに痛みが外へ吐き出されるようで、
少し身体が楽になる。
今朝から始まった陣痛は徐々に痛みを増してきて、
お昼をすぎる頃にはベッドに伏したまま
ほとんど身動きがとれなくなっていた。

「ぐ、具合はどうですか？
欲しいものとかありますか？
大丈夫かな……大丈夫かな？」
側では先ほどからラムダがあっちへ行ったりこっちへ来たり、
忙しなく動いている。
さすがに人間のお産は専門外らしく、
今日の彼女は見ているだけ。
作業は担当のスタッフにおまかせだ。
それが逆にじれったいのだろう。

励ましたり気遣ったり、頻繁に声をかけてくる。
もっとも、彼女の関心事は私の体調などではなく、
無事にキメラが生まれるかどうかだろうが。
癪に障ったからラムダの言葉はほとんど無視した。
答える余裕もなかったのだけど。

SAMPLE

「あっ……！ちょ、ちょっとちょっと！
破水してる！破水してるっ！！」
突如ラムダが素っ頓狂な声を上げた。

破水？痛みに意識が集中しすぎて気づかなかった。
確かに太ももを暖かな液体が伝っていく感覚がある。
胎内のキメラがいよいよ外に出ようとしている。
ラムダの悲鳴を聞いてすぐスタッフたちが駆けつけ、
辺りはにわかに騒がしくなった。

空気がピリッと張り詰めて、
皆が皆、緊張しているのが伝わってくる。
人間とモンスターとのキメラの出産なんて
誰も経験したことがないのだから、当然だろう。
一方で私もだいぶ余裕がなくなってきていた。

ずっと続く陣痛の痛みのせいで意識が全てそちらに向いてしまって、
他のことを考えることができない。
耐え難い痛みと我慢できる痛みが交互に襲ってくる
地獄のような時間が続く。
私ができることは枕を強く抱きしめて、
ただただこの苦痛が過ぎ去るのを祈るだけ。

この痛みはいったいいつまで続くの？
キメラはまだ生まれないの？
SAMPLE

「フリーデルさん！フリーデルさん！
もう出かかっていますよ！
もう少し、フリーデルさん頑張って！」
思考のまとまりが薄れていた頭の中へ、
ラムダの言葉がスッと入ってきた。

もう少し？もう少しでこの苦痛から開放されるの？
乱れる息を整えて、グッとお腹に力を込める。
その瞬間。

もう少し？もう少しでこの苦痛から開放されるの？
乱れる息を整えて、グッとお腹に力を込める。
その瞬間。
SAMPLE

もう少し？もう少しでこの苦痛から開放されるの？
乱れる息を整えて、グッとお腹に力を込める。
その瞬間。

SAMPLE

もう少し？もう少しでこの苦痛から開放されるの？

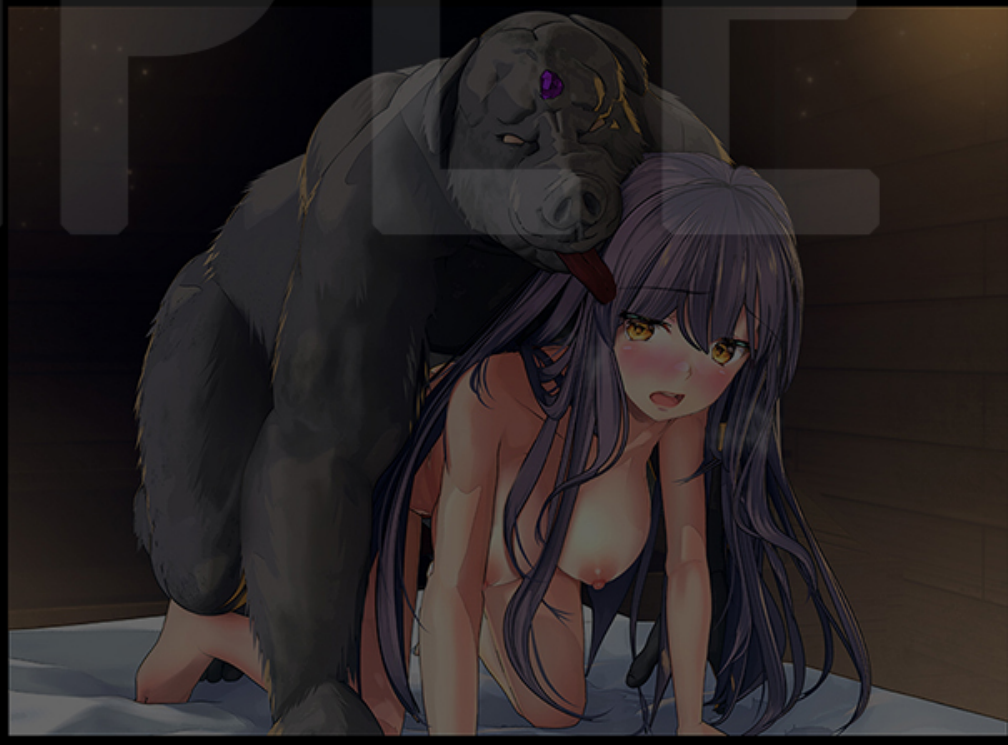
乱れる息を整えて、グッとお腹に力を込める。

その瞬間。

SAMPLE

SAMPLE

SAMPLE



SAMPLE

SAMPLE

「ブシュ、ブシュ、ブシュッ！」
クォーターが聞き慣れない噴き声をあげた。

表情は読み取りづらいものの、
どことなく笑みを浮かべているように見える。

警戒心はもはや微塵も感じられない。

どうやら私は彼に受け入れられたようだ。
そしてその眼差しには、「次はどうするんだ？」
という期待と好奇心が感じられた。

トラブートンブーとお腹を鳴らした。
最初になって、緊張に感じる。
そして元気でよく動く子だ。
ナナに似てやんちゃなお子なのかもしれない。

早く会いたい。
会うのがとっても楽しみ。

ビュッ！ビューッ！ビュウウウーーッ！！
ふたたび熱い奔流が私の中ではとばしる。
子宮口を精液の塊で殴られる感覚で、
私は三度目の絶頂を迎えた。

ナナの目を真っ直ぐ見つめる。
胸いっぱいに溢れる喜びをのせて、私は改めて感謝の言葉を伝えた。

「ありがとう、ナナ。私、今とっても幸せよ」

『んんーーっ！うんんんーーっ！』
一度では少ししか押し出せない。
呼吸を整えて、繰り返し、繰り返しいきみつづける。

少しずつ少しずつ、外へ押し出していく。
メリメリと産道を裂きながら
大きな塊が外へ向かって進んでいく。

自分の思い通りにメスを鳴かせる興奮心を覚えた……
そんな顔だった。

それからオ[illegible]と[illegible]は時間をはしない。
ただただ責められているだけだ。
[illegible]していいのではなく[illegible]を楽しんでいる。

『んっ……はぁ……ナナ、ナナっ！』
目を閉じ、私をいじめるナナの姿を思い描く。
それに乳首と陰唇への刺激が繋がる。
私はどんどん昂っていった。
陰肉が指をキュッキュッと締めつけた。
もう、来る！

チリチリと駆け回る快楽の頻度に注意しながら、
腰の上下を繰り返す。

ゆっくりゆっくり、
そして少しずつ速く速く。

深くと腰を下げるうみが。
まだ実感はわかない……
けれどこれで全部終わったんだ。
……はやくされて見おろう。
こんなことは、

私、彼女の仔を産むためにモンスターとまぐわいます。

シナリオ：錫ステラ
イラスト：過ぎた卵白

そして少女は気づいてしまった……

このモンスターとまぐわえば
大好きな彼女の仔を宿せると。

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止